

2015年度 国語 (問題)

〈H27092016〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

 ↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今日の若者たちはコミュニケーションに熱心だ。その手段としてインターネットのソーシャル・ネットワーク・システムや携帯、スマートフォンが使われたりしているが、それは単に仮想空間で結ばれるのではなく、ネットを道具にして顔を合わせる関係をつくる方向に向っている。シェアハウスをつくって、ともに暮らす仲間の世界を創造し、個人旅行よりも仲間とともにおこなう旅行を楽しむようになってきた。

いま農村では、さまざまな共同作業場や共同直売所が設けられている。地域のコミュニティづくりを目的としたカフェやレストラン、仲間たちの手づくり商品を売るコミュニティ・ビジネスは、都市、農村をとわずふえてきている。社会に貢献できるビジネスの確立をめざすソーシャル・ビジネスもさまざまなかたちで生まれてきている。

ともに生きる世界をつくるためには、ともに生きる経済をつくりだす必要があることもわかってきた。自分だけが勝ち抜こうとする経済のものでは、ともに生きる社会などつくりようもない。とすれば支え合う経済をどうつくっていく2 たらよいのか。この問題意識がさまざまなソーシャル・ビジネスやコミュニティ・ビジネスを生みだしている。

それは新しいローカリズムの成立だった。ローカルという言葉はもともとは地域を意味していた。だが今日用いられているローカルという言葉は、地域を地域たらしめている重層的な関係の方に向いている。つまりローカリズムとは、それぞれが関係の世界のなかで生きるという意味であり、地図上の地域を意味しない。

関係がつくりだすローカル世界。今日のローカリズムはその形成をめざしている。

そしてこのような新しい動きは、それまでの概念にも動揺を与えるようになってきた。たとえばそのひとつに家族がある。これまで私たちが家族と呼んできたものは戦後の家族の形態であった。それは夫婦二人を軸にして子どもがいたりするかたちである。ときには祖父母も同居しているが、近親者によって構成され、核家族化していく形態が戦後の家族である。ところがシェアハウスがひろがってくると、シェアハウスで同居するメンバーに家族を感じる人々が生まれてきた。シェアハウスだけに限らず、たえず会話をし、ときに協力し合う仲間の世界に、新しい家族を感じる人も現われてきた。そのメンバーのなかに結婚し出産する人たちが現われても構わない。結婚した人をもふくめて、共にいることに安心感がある関係のなかに家族を感じる。そんな家族観も芽生えはじめた。もちろん、これからそれがどう展開していくのかはわからない。しかしここでも、旧来の考え方が変化しはじめていることはみておいてもよい。

これからは、これまで常識だと思われていたものが、次々に虚無化していくだろう。なぜなら今日の常識とは、近現代の常識にすぎないからである。そして新しい試みが積み重ねられていく。

大きな企業に勤めれば生涯安泰だという日本の戦後の常識はすでに虚無化している。国家は私たちの暮らしを守ることでできるはずだという常識も虚無化した。そしてそれは、代議制民主主義をも虚無化させる。よい政権ができれば私たちの暮らしも守られるという発想自体が、先進国が世界の富を独占した時代のものでしかないからである。もちろん多少はマシな政権を選ぶことはできるだろう。それも無視してよいことではないし、ときには権力の暴走をソシするた4 めに投票することも必要だろう。だが代議制民主主義とは、私たちが「人々」として生きることを強制するシステムであり、すべての「人々」を支える能力を国家が失った以上、それは根本的には二重の虚無でしかないのである。第一に私たちが「人々」として生きなければならないという虚無において、第二にその「人々」を支える能力を国家が失ったという虚無において。

さらには個人を基盤にした市民社会という構造も、虚無のなかに崩れ去っていくだろう。

近現代はさまざまな革新的なものを生みだしているようにみえた。確かに政治、社会思想では次々に新しい理論が生まれ、科学も経済も新たな地平を切り開いていった。だからこそ「人々」は解放されていく時代という熱狂のなかに巻き込まれていったのである。

だが私は、近現代とは基本的には保守主義の時代だったのではないかと思っている。

たとえば、科学は確かに進歩した。その意味では科学は革新的に展開した。しかしそれは、科学的方法論は正しいという絶対的保守主義を前提にして進歩したものに過ぎなかった。だからこの時代は、科学という方法に依拠しないでものごとをとらえる思考を衰弱させた。

国家のあり方については議論があっても、国家の存在自体は前提でありつづけるという保守主義、市民社会のあり方はさまざまな提起されていても、市民社会が前提にあるという保守主義、経済のかたちについての論議はあっても経済発展が人々を豊かにすることを絶対化する保守主義。そういった保守主義がこの時代を覆っていた。

私たちはたえずさまざまなことについて議論し、そのいくらかを改革してきた。だがその前提となるものは、与えられたものを受け入れるしかなかった。すなわち成立したものを追認するという保守的な生き方に巻き込まれていったのである。資本主義が生まれれば、資本主義を追認しながら生きていくしかなかった。もちろんそれを否定しようとした社会主

義の運動も発生している。だがこの動きも、資本主義の矛盾は社会主義によって解決されるという与えられた所見を認めるかたちでしか展開しえなかった。与えられたものを追認する保守主義から抜け出すことはできなかったのである。市民社会が生まれれば市民社会を受け入れながら暮らし、国民国家が生まれれば国民国家を受け入れながら暮らす。科学や技術が進歩すれば、それもまた受け入れながら暮らす。それはちょうど今日の携帯電話のようなもので、携帯電話が生まれる前から、この電話の誕生を熱望していた人など一人もいない。ところが、携帯電話が誕生した。だからそれを受け入れた。その結果多くの人が受け入れてしまうと、携帯電話をもたない暮らしが困難になってしまった。誰もがもっていることを前提にした社会ができてしまったのである。

近現代とはすべてがこんなふうに展開していった。受け入れていくうちに、受け入れざるをえない社会がつくられていった。私が近現代とは

甲

だというのは、このような意味においてである。

世界の富を先進国が独占している間は、この保守主義は自分の身に安泰をもたらしていた。現実を受け入れながら「人々」の群れのなかにいれば、とりあえずは一生が保障されていた。しかし、今日のように「人々」を支える構造が崩れてしまうと、現実を受け入れても、資本主義も国民国家も市民社会も私たちを支えてはくれない。だからこのような時代になると、受け入れることに私たちは疲れを感じるようになってきた。とりわけ保障のない時代を生きていることと向きあわざるを得ない若い世代では、受け入れることへの疲れが顕著になってきた。

国民の義務といわれている事柄をリコウするの**も**疲れてきた。納税、年金や健康保険などの社会保険料を納めるのも疲れる。さらには勤めた企業の「ルール」に従うのも疲れてきた。あらゆる義務や責務をはたしたところで、国民国家も市民社会も資本主義も自分たちを「人々」として扱い、しかもその「人々」を支えてはくれない。

その疲れは国民国家、市民社会、資本主義のイメージを虚無へと誘いだす。そしてイメージが虚無だということは、それ自体が虚無だということだ。

乙

もちろん資本主義は私たちの労働や暮らしに影響を与えつづけているという意味では、実体として機能している。だがその実体のイメージが虚無化するとき、その人にとって資本主義は虚無の世界でしかない。本気で人生をかける対象でもないし、頑張つて昇給や昇進をはたす対象でもない。とりあえずその内部にいる他ないがゆえにかかわっている。それだけの対象である。仕方がないからかわつてはいるが、その世界に虚無をみだしている、そんなふうに言えばよいのだろうか。

近現代という時代が力をもっていた間は、人間たちはこの時代がつくりだしていくものに熱狂することができた。逆に言えば人々の熱狂があつたからこそ、この時代は力強かつたのである。(イ)

高度成長期の社会もそのひとつだった。人々は経済成長に熱狂した。だから家庭も余暇も趣味も顧みずに、ひたすら企業業績を上げようと働いた。毎年給料が上がる雰囲気の中で、街は活気に満ちていた。高度成長がこの熱狂を生みだし、この熱狂こそが高度成長という時代をつくりだしていったのである。(ロ)

バブルの頃も熱狂の時代だった。そしてその熱狂がバブルの時代をつくりだしていった。社会主義という熱狂、反体制という熱狂をもふくめて、熱狂こそが近現代の活力であり、この時代をつくりだしていったのである。(ハ)

(二)

そしてこの時代には、人々をコブ^oしていくような熱狂を伴わない、新たな模索が開始されていた。確かな関係を築きながら、「人々」でしかない生き方から抜けだしていくこうとする着実な歩みを人間たちは模索しはじめたのである。

(ホ)

それは関係とともに生きるという存在のあり方だ。自然との関係のなかに生きる。他者との関係のなかに生きる。それは関係的存在としての人間のとらえ直しである。

そういう動きがさまざまな地域、さまざまな領域で広がり、それが関係を軸にしたローカリズムの時代をつくりはじめた。

問一 傍線部 a、c の片仮名を、漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二 傍線部 1 「ネットを道具にして顔を合わせる関係をつくる方向」とはどのような方向を意味しているのか。その説明として最も適当なものを次のイ、ロ、ハ、ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ ネットを活用して地域のコミュニティを確立するために、個人の資質を最大限に生かしたソーシャル・ビジネスを広めようとする方向。

ロ ネットの影響のもとで近現代が生み出したさまざまな特質をきめ細かく検証して、そのなかからより効率的なものを推進しようとする方向。

ハ ネットの効果に依拠した利己的な経済ではなく支え合う経済を実現させるために、改めて集団のなかの個人の位置を確立しようとする方向。

ニ ネットによって結ばれた世界のなかで、仲間たちがともに生きようとする関係を構築しつつ自律した関係の世界を創造しようとする方向。

問三 傍線部 2 「それは新しいローカリズムの成立だった」とあるが、「新しいローカリズム」に相当する人間のあり方を示す最も適当な五字の語句を文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問四 傍線部 3 「旧来の考え方が変化しはじめている」とあるが、その「変化」をもたらす関係を端的に表す語句を、文中から二字で抜き出し、解答欄に記せ。

問五 傍線部 4 「私たちが「人々」として生きること」とはどのようなことか。最も適当なものを次のイ、ロ、ハ、ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 平等で自由な「個人」として生きること。

ロ 固有の「個人」として扱われない「国民」として生きること。

ハ 暴走する「権力」に抗うすべもなく個性を抑制して生きること。

ニ 「国民」を支えるという能力をもち「国家」が維持できないと知って生きること。

問六 傍線部 5 「それはちょうど今日の携帯電話のようなもの」とは、どのようなことの比喩として用いられているのか。そのことを表す一文を傍線部 5 より後の文中から抜き出し、その文の最初の五字を解答欄に記せ（句読点も一字とする）。

問七 空欄 甲 に入るのに最も適当な語句を、文中から五字以上十字以内（句読点も一字とする）で抜き出し、解答欄に記せ。

問八 空欄 乙 に、次のイ、ロ、ハ、ニの文を正しく並び替えて入れるとしたら、三番目に来るものはどれか。最も適当なものを一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ この人たちにとっては、それらは確固たる実体である。

ロ だが他方では、それらに虚無のイメージしかいだかない、ゆえにそれらが虚無でしかない人たちもふえつつけていく。

ハ だから資本主義のもとで勝利者になろうと頑張り抜く人もでてくる。

ニ もちろん、国民国家や市民社会、資本主義が虚無だとは思わない人もいる。

問九 文中から次の一文が脱落している。次の文が入る場所として最も適当なのは（イ）、ロ、ハ、ニのうちどれか。イ、ロ、ハ、ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

とすると近現代は終わろうとしているはずだ。

問十 次のイ、ロ、ハ、ニの文のうち、本文の論旨に合わないものを一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 近現代に獲得されたものと人間との関係が虚無的な関係に移行しつつあるときだからこそ、革新的な熱狂を復権するために可能なことに取り組み、保守的な傾向を超越する必要がある。

ロ 私たちはいま大きな変革期を迎えており、近現代を支配したような熱狂もなく、いかなる関係の中で生きたらよいのかを模索する試みがいたるところで生まれているという状況にある。

ハ いまは「人々」として生きた時代から「それぞれ」として生きる時代への転換期であり、「それぞれ」の生き方を可能にする関係のあり方を模索するという意味で、新しいローカリズムの時代である。

ニ 国民国家や市民社会、資本主義が「人々」を成立させ、関係のなかで生きてきた人間を個人に分解し、その個人を「人々」として管理したり切り捨てたりする構造こそが問題なのである。

次の文章は『松浦宮物語』の一部である。遣唐副使として唐に渡った氏忠は、唐の若い帝とその後

帝、例のいとなつかしう語らはせたまふ。「春を過ぐしてと聞きし日数も、むげに残りなくなりぬるこそ、またいつと聞かむ月日をだに、しか慣らひては、いかばかり待ち遠におほゆべきを、かくて止みなむこそ言ふかひなけれ」とて、おしのごはせたまふ。いみじうおよすげて、あはれにかたじけなく見たてまつる。「なぞやあぢきなかりける契りのほどこな。かばかりなる御氣色に慣れきこえて、あながちに急ぐ心よ」^①とうちおほゆるも心弱けれど、さまざま乱るるふしぞ多かりける。

「我が国の習ひ、女主朝に臨みて、かならず乱るる跡多かる
 たまふ君、かならず身の過ちを知りたまはず。いはむや、おろかなる女の身、知ることなくて、万機の政に臨む、いかに
 ばかりの過ちかあらむ。⁴ 向かへる面をはばかりて、行なふところをいさめずして、下に謗そしることをする、国のため身の
 ため、さらにその益なし。昔の跡に任せて、とがを謗そしれ」とのたまひて、誹謗の木を立てたまふ。⁵ 世をしらせたまひて
 のち、まことに横様なることなれば、いつしか誇りたてまつる人なし。

問一 傍線部「おしのごはせたまふ」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

問二 傍線部①「うちおほゆる」、②「忘れ」、③「のたまひ」、④「務め」、⑤「しらせ」の主語をそれぞれ次のイ・ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。同じ符号を二度以上用いても良い。

問三 空欄 A
に入る最も適当な語（漢字一字）を本文中から抜き出して、解答欄に記入せよ。

イ 日本に帰ってからまたこの国に来ようとする長い旅
口 日本に出発する港までの長い陸路を再びたどっていく旅

再び得られた安穩な生活を捨てて日本に帰ろうとする長い旅

二 もはや再び連絡を取り合うことがむずかしくなるような長い旅
ホ また一大決心をして帰ろうとするのを断念させるような長い旅

問五 傍線部 a～f の助動詞・助詞についての文法的説明として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ a は自発、b は主格、c は主格、d は尊敬、e は推量、f は当然をあらわす。
ロ a は受身、b は主格、c は連体修飾格、d は尊敬、e は推量、f は命令をあらわす。
ハ a は尊敬、b は連体修飾格、c は主格、d は受身、e は推量、f は推量をあらわす。
ニ a は可能、b は連体修飾格、c は主格、d は受身、e は当然、f は推量をあらわす。
ホ a は自発、b は主格、c は連体修飾格、d は尊敬、e は当然、f は当然をあらわす。

問六 傍線部 3 「今の御代に時なるべけれど」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 今の帝の御代がちょうど良い機会なのだが
ロ 今の帝の御代は軍勢を動かす時であろうが
ハ 今の帝の母である后との血縁を生かす時だが
ニ 今の帝の御代に権勢を持つてもよいはずだが
ホ 今の帝の意志によりその時が到来したはずだが

問七 空欄 B に入る語として最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イこそ ロなむ ハだに ニさへ ホには

問八 傍線部 4 「向かへる面をはばかりて」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 顔を隠すようにこっそりと
ロ 反対意見が出ることを恐れて
ハ 顔を合わせて言うことを遠慮して
ニ 互いに顔色を見て意見を言わないで
ホ 正面から正論を主張することを避けて

問九 本文の内容と合致するものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 氏忠は、女性が政治を行うことには古来批判が多いことをふまえて、母后に人々が意見を言う機会をもうけるのが良いと考えた。
ロ 母后は、帝がまだ若いため、氏忠を頼りとしているが、氏忠が日本に帰国してしまうので、かわりに誹謗の木を立てさせて、民意を問おうとしている。
ハ 帝は、頼りとする氏忠が帰国してしまう上、母后が政治に携わるのは、古来女性が政治を行うことは批判されがちなので、不安に思っ誹謗の木を立てさせた。
ニ 氏忠は、帝の後見として、母后の兄の將軍の助けを借りながら政治を行っているが、過失があつてはいけな思考え、自分を批判してもらうための方策を考えた。
ホ 母后は、帝の後見として公正な政治を行っており、国はよく治まっているが、親しく仕えてくれる氏忠が日本に帰国してしまうことを残念に思っている。

問十 次の漢文は本文中の二重傍線部「誹謗の木」に関連して、前漢の皇帝文帝が臣下に述べたとされる言葉である。
この漢文を読んで後の(1) (3)の問いに答えよ。

古^{いにへ}之^二治^{をムルヤ}天^ヲ下^ニ朝^{有^ニ進^善之^旌、誹^謗之^木、所^以以^{通^ニ治^道而^{来^中諫^者上}}者^上諫^者者^上也。}

〔漢書〕による

注 古…太古。ここでは堯・舜の時代を指す

通治道…統治の道を開くこと

来…来させる、招くこと

妖言…あやしいつくりごとを言いふらすこと

上…天子、皇帝

将何以…いったいどうやって

賢良…かしくて善良な人

(1) 傍線部5「朝^ニ有^ニ進^善之^旌、誹^謗之^木」の説明として最も適当なものをイ、二の中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 遠方の賢良について善事を書きこむ旗と、悪事を報告する板とが、朝廷に掲げてある。

ロ 民衆に対する善い政策を書き入れる旗と、悪事を報告する板とが、朝廷に掲げてある。

ハ 諫言する者について進言を書きこむ旗と、批判を書きこむ板とが、朝廷に掲げてある。

ニ 王朝に対して善政の提言を書きこむ旗と、批判を書きこむ板とが、朝廷に掲げてある。

(2) 傍線部6「是使衆臣不敢尽情」は「これしゆうしんをしてあへてじやうをつくさざらしむ」と訓読する。解答欄の白文に最も適当な返り点を記入せよ。ただし送り仮名は書かないこと。

(3) 傍線部7「其^レ除^ケ之^ヲ」の「之」によって指示されている漢文中の語句として最も適当なものを次のイ、二の中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 進善之旌

ロ 誹謗之木

ハ 誹謗妖言之罪

ニ 遠方之賢良

〔以下余白〕

